

中国はどうなるのか
談話室より……………1面
12面

おもな内容

東京談話

東京談話室

千代田区平河町2-3-10
ライオンズマンション平河町
214号

TEL 261-5998

第242号

1年11月10日

中国はどうなるのか

本稿は第二四五回定例会の講演
を要約したもので文責は編集者
にある。

中 嶋 嶺 雄
東京外国語大学教授

テレビ記者会見

本日(九月二十六日)中国
共産党中央政治局常務委員六
人が記者会見するということ
で、私はNHK衛星放送の同
時解説を担当して、今スタジ
オをぬけてまいりました。

政治局の六人がどういう形
で出てくるか注目されており
ました。これはほぼ予想通り
江沢民・李鵬・喬石・姚依林
宋平・李瑞環という順序で並
んで居ました。実は天安門事
件があって、四中全会が開か
れて、江沢民が総書記になっ
た直後の人民日報では、江沢
民・喬石と喬石が二番目に出

ていた時期がありましたけれ
ども、それが入れ変っている。
これはある意味では当然の
ことであって、今の政治局の
メンバーの序列がこれで大体
決まった。またその時には宋
平が李瑞環の後に居たのです
が、今日の順序では李瑞環が
第六番目で、彼は天津市長を
やっていた人物で、一番年齢
が若いのですが、その李瑞環
が最後に出ていました。私の
記憶はこういう揃い踏みの内
外記者団との会見をやったと
いうことは、中国共産党始ま
って以来のことです。そして
かつて十三回大会の後新しい
政治局員が選ばれたときに、

一種のカクテル・パーティー
方式で、内外の記者団と会っ
たことはありますが、今回は
一列に並んで、内外の記者団
のかなり率直な鋭い質問に答
えるという形でありました。
当初、江沢民は非常に緊張
していて、鄧小平の発言をと
らえて、ああいう天安門事件
というのは起こるべくして起
こった。国外における勢力と
国内の勢力が結びついて起こ
ったという発言をしていた。
しかしながら最後はかなりリ
ラックスしたような感じがあ
りました。
特に台湾の記者に対して、
懇切丁寧に答えていました。

これは非常に面期的なことだ
と思います。台湾の代表的新

聞、連合報と中国時報の女性
記者二人が、熱心に率直な質
問をしていました。まず連合
報の記者は一国兩制というこ
とを香港に対して言っている
けれども、果してそれがその
通りなのかとか。台湾では特
に天安門事件以降、武力解放
をするのではないかという見
方もあるけれども、それにっ
いてどうかとか。

また中国時報の記者は、指
導者の間には「六・四風波」
という言い方があったり、

六・四動乱という言い方もあ
って、かの李鵬と江沢民総書
記の間でも、ニュアンスの違
いがあるのではないか。意見の
対立があるのではないかとい
うことも聞いていた。それに
対して意見の違いはないん
だが反革命暴乱という点では
今の指導部は全員が一致して
いるという答えがありました
けれども、江沢民が賞めて居
たように、とてもきれいな中
国語で、要領よく質問してい
たので、この台湾の新聞記者

に対してはものすごく丁寧な
答えている。

香港も香港大公報の女性記
者でありましたけれども、同
じように丁寧な答えていて、
やはり頼るところは台湾・香
港のみなさんという印象でし
た。だから何となく西側は、
結局何とかかんとか言っ
ても、西側の勢力即ちアメリカ
だと思えますが、今の中国を
共産主義から資本主義の方へ
持って行くとする。政府を
転覆するのが西側の援助の目
的である。改革開放を支援す
るという西側は、結局今の体
制を覆えそうとする。

ポーランドを見てごらん
さいと言わなければかりなこと
でした。それに対して香港は非
常に動揺しているけれども、
依然として一九九八年には、
香港を返還してもらって、現
状を維持するから安心して下
さいと言ひ、台湾に対しては
『一国兩制』ということ、
統一をするのだけれども、そ
の時期は今すぐではない。日
程表がまだできていないとい
うことを言って居ましたか

ら、当分は台湾の経済力を大
いに、中国の改革と開放のた
めに力を貸してほしいと言わ
るばかりの、融和政策いわゆ
るリップサービスをしていた
のが非常に印象的でした。

おそらく中国共産党の最高
指導者が、実力者は鄧小平で
あるにしても、最高指導者が
公の席で、台湾の記者にあん
なにサービスをして、答えた
ということは無いのではない
かと思ひます。

全般的にそういう形であり
ましたけれどもしかしながら
ものごとの本質については、
絶対に譲っていないという
ことです。今、中国は改革と
開放を続けるのだと、鄧小平
が指導した七八年の三中全会
以来の方針は断固として続け
ると、そうは言いながら、他
方ではブルジョア自由化とい
うことに対しては、絶対にそ
れを許さない。ブルジョア自
由化を許すことになったら、
この国の根本が崩れて行く
ということですから、或る意味
では大変に矛盾しています。
そして趙紫陽は今どうして

いるかという、非常にきわど
い西側の記者の質問がありま
したけれども、趙紫陽は党員
としては残っている。だから
生活も保証されていると言っ
ていた。しかしながら趙紫陽
は非常に重大な誤りをおかし
た、この誤りは党を分裂させ
国家を分裂させる誤りであ
り、それはブルジョア自由化
に対する、彼の判断が甘かつ
たからである。こういうこと
をしきりに強調して、この趙
紫陽についてはいろいろ審理
しなければならないところが
あると語っていた。

中国ではこの九月の終り頃
までに、ブルジョア自由化に
関する文書を一斉に摘発する
ための徹底的な審査が行われ
ており、これを行っているの
が、党中央規律検査委員会の
第一書記を兼ねる喬石です。
今日は喬石は63ですけれど
も、あまり発言はしませんで
した。そういう状況を反映し
ていると言っているかと思ひ
ます。
ですから今日の会見は或る
意味では、西側の記者の率直

な質問に対して、原則論で答えたという点では、期待外れであったと思います。しかしながら今の中国の当局者は、あの天安門事件をもたらした六月四日の武力弾圧は、絶対に間違っていないかった。絶対に正しかったと言いはっていません。そして鄧小平をはじめとする判断は正しかったということを言っている。その限りにおいては、今日のような会見が限度ではなかったかと思えます。

そこで興味深いことは、当初から江沢民は鄧小平を持ち上げていました。これは当然のことです。ところが横に居る李鵬について非常に気を使っていることです。そして李鵬も同時に江沢民を立てているのですが、私はこのように見るわけです。それは、この三ヶ月余が経って、江沢民という人物は、今の体制の中ではかなり形が出来てきたという気がします。やはり位は人を作るわけです。

それから今日こういうことも言っていた。ゴルバチョフ

が来たときに、自分達は非常に申し訳ないことをした。北京では天安門広場がデモで埋まっていた、人民英雄記念碑に献花もできなかった。ただ自分は上海ではちゃんと秩序正しく彼を迎えてプーシキンの銅像があるそうですが、そこに花輪を捧げてもらったと言っています。これは聞きよによって李鵬に対する当てつけでもあります。自分では上海でちゃんとやっていたのではないか。あのとき混乱していたのは北京であると言わんばかりのことも言っているわけです。

これはやはり鄧小平があり、それから楊尚昆があつて、この二人が上に直系として居ると思いますけれども、その限りに於いて江沢民を支援している。つまり彼を後継者にしているのだということが、最近さかんに言われています。ただどこかつての胡耀邦も、それから趙紫陽もそうであるように、江沢民が将来的にもそうであるかは、全く保証はないのですが、つまり鄧小平

の後盾がある限りに於いて、江沢民という人物がかなり形を整えつつある。これに対しては李鵬も一歩譲っているのではないかと思います。

それからもう一つがった見方をする。李鵬は今回の事件の責任をとらされる立場にある。江沢民の方は手を汚していません。あの時に彼が登用された一つの原因は、上海においては武力を使わずに、労働者のゼネストを鎮圧したわけですから。労働者糾察隊を使つて。そういうものを使って鎮圧したという功績が買われたということ。それから世界経済導報というような、民主化を求める新聞があるので、新聞の編集長を更迭したりして徹底的に締めつけた。そのことが江沢民の功績であったということも言えます。

今日は日本について言及したかと言いますと、一回もありませんでした。伊東正義が出て行って、一生懸命中国側の意を迎えるような、言ってみれば中国側がああいう政策

をとって、事態を合法化していく水先案内の役を買って出たにもかかわらず、それに対して一言も言わなかったのが印象的でした。ということは、西側というものに対する中国側の考え方の本質的なところだと思えます。アメリカなりフランスなりサッチャーなり、やはり日本も西側の一員ですから、西側というのは警戒しないといけない。

西側が中国を援助する、西側が中国の開放政策を支援しようとするのは、結局この国を共産主義から段々と離脱させようとする。これは西側としては当然のことです。ポーランドに対するアメリカの政策もそうだと思いますけれども、そういうことに対して、かなり本質的なところで中国は、警戒し始めていると思います。だから西側の技術なんかを入れて、開放政策をやると言いながら、非常にそれは警戒的です。こういうところは私共日本も、中国に対する政策の上で、やはりきちんとおさえなければならな

いと思います。

共産党体制の中国

中国はやはりあくまでも共産党の政権下ですから、その前提の上で日中友好があるので、彼らはまさにこの共産党体制が、外部から内部からも崩されようとしていることに危機感を持って、あの天安門事件を徹底的に抑えましたから、そのことについては私共は充分、自覚しておかないといけないと思う。現に鄧小平は天安門事件の禍中でこう言っています。「結局西側はこの中国の共産主義を、何とか何とか言って、資本主義化しようとする。だから少しでも資本主義的な政策をとれば、西側はいい顔をする」と言っています。だからそれに対しては、徹底的に注意をしなければ、内部から崩れてしまうぞということを言い張っていることを忘れてはならない。今日の会見でもそれが凄く出ていたような気がします。

日本では中国民主連合と訳していたようですが、正式には民主中国陣線というものが旗上げをしました。今日の新聞にも出ていたと思います。これはパリが今、日本と較べて大変面白いのですが、パリにぞくぞくと今回の事件で亡命した人達や学生運動の活動家などが集っています。それからアメリカにも逃げて行った人が居ます。そういう人達が集って、この九月二十二日に民主中国陣線が結成されました。その議長が嚴家其。この人は中国の社会科学学院の政治改革研究所長をつとめた中堅の政治学者で今回の運動の理論的な指導者の一人です。

彼を議長に選んで、副議長には学生の活動家で、北京師範大学の学生で、現在ハーバード大学に籍を置いていますけれど、この間パリに逃げて行ったウーアル・カイシです。ウィグル族です。彼を副議長にして民主中国陣線というものができた。こういうことについて非常に意識しているのではないかと思います。この点フランスは日本とずい分違って、中国がいくら抗議しても、彼らを保護し続けると思っています。

この民主中国陣線は何を目標しているかです。実は私、ついこの間ヨーロッパから帰ってきたばかりで、パリでこの旗上げをした嚴家其とも会いました。フランスの中国研究者はみんな、非常に今の中国の民主化を支援している。それからフランスのミッテラン政権自体が非常に民主化運動に呼応して(フランスの外務省もそうです)亡命者を一人の間のフランス革命二百周年のパレードでは、中国の天安門事件で摘発されることになって、指名手配され逃がれてきた人達や或るいは学生運動のリーダーを、パレードの第一線に並べているわけです。この中国民主陣線の議長になった嚴家其にフランスの中国研究者が間に入って、是非会ってほしいと言うのでパリで会いました。私が一番聞き取った事は、中国の民主化運動の本質は何であったか。今の体制内の改革なのか。つまり今の中国共産党は民主的でないから、その制度を民主的にすれば共産党でいいのかどうか。私はパリに行く前に「中国の悲劇」(講談社)という本を書いていました。

その中で、今回の運動というのは、いわば単なる民主化運動ではなくて、共産主義体制そのものに対する根本的な挑戦であった。言ってみればもう共産党の支配は御免だ。もう社会主義は駄目なんだ。マルクス・レーニン主義はもう中国を近代化できない。こういうようなところまで中国の民主化の指導者は考えていたのではないかと書いています。そして今回の事態を、革命権力に対する反対運動である。ですからタイムという雑誌が書いていたように、共産主義への反乱であり反逆である。そのように見なしております。

ですからその点はどうなのかと嚴家其に聞いてみました。そうしたら彼は、正

に自分達はそうなんだ。そこに問題がある。単なる民主化ではないということをはっきりと言っていました。ということになりますと、ますます今の中国の指導者からすれば許せない。それはまさに真っ正面からの挑戦になるわけです。そのことを彼らも知っているわけです。

そこで私の書いた本を敵家其にあげ、その中で私は中華人民共和国は、やがて解体して行くのではないか。そして例えば今の体制が二十一世紀まで持つであろうか。或るいは二十一世紀に中華人民共和国が、今のような体制で、共産党の一元独裁で果して、あれだけ多様な問題をかかえて、しかも人口も非常に多くなるのにやって行けるだろうか。おそらくもうやって行けなくなつて、それまでには中国も大きく変つて、やがて中華連邦共和国になるのではないかと書きました。

そうすると彼はその部分を見て、まさに自分達が求めているのは、これだと言って私に彼は感激して十六文字を書いてくれました。民主中国陣線が九月二十二日に発足する。私はそれを知って居ました。いろいろな関係で公表はしませんでしたが、そしてそのスローガンは「結束専制」、つまり今の専制体制を一党支配体制を終息させる。それから人権を擁護する政治「維護人権」。それから共和国を再建しようという「重建共和」。それから「締造連邦」。中国は連邦制のようにならなければ無理だということ。この十六文字のスローガンをかかげて、中国民主陣線を発足させると言っていました。

まあ言ってみれば孫文の辛亥革命をもう一度外国でやろうとするような雰囲気があります。それに対してフランス政府も、或るいは海外の華僑も全面的にバック・アップしているようです。ところが私自身も民主化を求める運動に共鳴するものがあるとは言え、果して今の中国のあの軍事的独裁体制を海外に居る人達が旗あげして崩せるだろうか。それはそう簡単なことではない。国内でさえもあれほどの百万ものデモをやったけれども、最後にはみんな銃撃されて抑圧されてしまったわけですから。そういう疑問が当然わいてきます。

ですから心情的に共感することは、確かに簡単かも知れないけれども、政治的なリアリズムの立場からみると、彼等が果して今の中国を変えて行くことができるであろうか。その辺をいろいろ議論を試みました。それは何とも言えません。しかしながら彼等も命をかけているわけで、それなりの見通しを持っているわけです。彼等なりの見通しを持っているということ。今、今の中国の体制が決して一枚岩ではなくて、非常に亀裂が深いということです。

そのことがあるが故に海外のこういう運動が、やがて国内の民主化運動と呼応するところによって、彼等は暴力的にやるとは言っていない。ポーランドのように連帯的にやると言っています、やがて成功する日があると考えているようです。

解除できない戒厳令

そこで本日の記者会見を離れて私の分析を申し上げますと、やはり今中国で戒厳令が解除できないということ。これはかなり重要な問題だと思えます。何故戒厳令が解除できないのか。この十月一日は建国四十周年です。中国人は三十周年とか五十周年よりも、四十という年を節目として非常に重要視するわけです。四つという数字を好みます。四つの現代化とか所得の四倍増とか。四人組もそうですけれども、東西南北、四、四ということ、日本人の嫌いな四という数字が好きです。そして昔から四十年というのは節目であった。

そういう意味では十年づつ四回一まわりして一段落し、その四十周年を戒厳令、つまり軍事管制下において、首都の戒厳令の中で迎えなければならぬということ、何よりも中国共産党及び中華人民

共和国の威信の喪失に違いないわけです。もう中国は安定して居ますと言うならば、当然戒厳令を解除して、建国四十周年を迎えるべきです。それができないわけです。その理由は何か。いろいろなことが言われています。だけどその理由の最大のものとしては、やはり治安がかなり深刻だと。あの六月四日前後の動乱のときに、かなりの武器が奪われたままです。

我々の常識からすれば、あんな警察国家が、徹底的な摘発をやっているのに、どうして武器が摘発できないのか。これはかなり大量に武器が流れて、そして同時にそれが摘発できないほど、いわば今の勢力に反対する側も、真剣勝負になって地下活動をやっていっているのか。これが第一の理由です。

それから第二の理由は、今日の会見でも盛んに言っていましたけれども、趙紫陽は反革命罪に問われている。趙紫陽グループの摘発をやらなければいけない。これは国務院

とか党中央の改革派の主なメンバーや、中堅幹部とかはみんな趙紫陽に近かったわけですから。ここを根こそぎ一掃するということは困難である。逆に学生運動と党内の趙紫陽と結びついたことによって、いわば江沢民指導部にとって、敵の陣営を大きくふくらませてしまった。初めは趙紫陽と学生運動は別だと思っていた。最後に趙紫陽と学生運動を一緒にくっつけて、趙紫陽が悪いんだという形にしました。

これは本来は学生達は何も趙紫陽を救うために運動を起こしたわけではない。初めから連絡があつてやったわけではない。あの民主化を求めた知識人の声は、趙紫陽だって同じではないか。自分の子供を海南島の開発会社の副総裁にしたり、自分で沿海地区経済発展戦略と言いながら同じではないか。自分の娘を北京の長城飯店の副支配人にしたりして、同じような不正特権をやったり、同じような共産党の幹部としてやっているで

はないか。そもそも趙紫陽は胡耀邦の失脚のときはどうだったか。学生達は胡耀邦にみんな共感したわけです。

胡耀邦失脚のときは鄧小平と一緒にあって、胡耀邦追い落としをやった張本人が趙紫陽ではないかと言っているのですから、学生達は初めから趙紫陽と一緒にあって運動をやったわけではない。つまり、学生達は中央で孤立化しつつあった趙紫陽を救う為にデモをしたと云うのでは決してなく、趙紫陽の側が学生たちの民主化運動を意識して発言し行動をしたと見るべきであろう。ところが趙紫陽はゴルバチョフが来て学生運動が盛り上って行く最後の瞬間に、鄧小平との訣別を決意して、学生達と一緒にやることにかけたわけです。それでデモが大きくなって、それで一時反李鵬、反鄧小平の運動がぐっと大きくなった。それがまさに戒厳令施行の原因です。そして趙紫陽を軟禁して一挙に戒厳令に持って行った。

て行ったけれども、軍がなかなか動かなかった。そこで大量の正規軍を投入した。三八軍なんかは抵抗していました。六月二日、三、四、五日ぐらいの頃には、何と北京の近郊に三五万の正規軍が展開していたわけです。これは日本自衛隊もアメリカの国防省も、衛星情報を通じてつかんでいた。あの広場に最後に残っていたのは三千名も居なかった。何故三千名の学生を排除するのに、十万の正規軍を広場に突入させ、それに三万に近い正規軍を北京の近郊に展開させていたのか。これは学生を排除するためではない。学生を排除するためだけであれば、公安警察の部隊がありますから、公安警察の部隊で催涙弾と電気銃と警棒で排除できるのです。それを銃をもって正規軍を突入せざるを得なかった。そういうことによって、権力中枢における真つ二つに割れた、二重政権状況を鄧小平側に有利に展開させて行く、その強行突破は必要であつたわけです。そ

のことがあの戒厳令から武力制圧の最大の原因です。

このように見ると、この過程というのは大変に深刻な状況がありました。それからゴルバチョフが来ました。そして趙紫陽が党内の最高機密を洩らした。鄧小平は引退したはずなのに、中国の全ての重要事項は鄧小平が決めることになっている。このニュースはあなたに初めて打ち明けますと言って、中国の中央テレビ局が中ソ首脳会談の、各首脳の冒頭部分を世界に放映した、その十分間くらいをとらえて、趙紫陽はその冒頭から機密を洩らした。私はこれをテレビで解説していましたが、非常に強い姿勢でそれを言っているわけです。

趙紫陽がそれを言ったということは、彼は最後に学生運動にかける。自分は今鄧小平打倒を宣言したのだ。そういうところから十七、十八のデモが急速にふくらんできました。そして北京の治安をまかせられていた三八軍は、これはもともと近代化された軍

隊です。そして北京を警備する北京軍区の最精鋭の部隊ですけれども、例えば北京の状況についても良く知っている。それから現に自分の息子や娘がデモをやっているかも知れない。実際そういうケースがあるわけです。それから北京大学の学生達の軍事訓練はいつも自分達がやっている。

こういうところから非常に学生達に加担する雰囲気がありました。そもそも三八軍というのは、胡耀邦の追悼集会に幹部が全員出ている。それから五・四運動の七〇周年記念には、みんな祝賀するために準備をしていた。これが三八軍ですから、まさに学生達と一緒にいるようなものなのです。そういう軍隊が現にあったわけです。だから北京軍区で一番重要な軍隊が背いたわけです。自分達は北京は騒然としていましたから、ゴルバチョフの身に万が一のことがあっては大変だと。だから北京の治安は最善を尽くすけれども、学生達は排除したくないと言います。それが十八、

十九日。そして二十日に戒厳令ですけれども、二十一日に三八軍の副軍長が自殺したり、軍長が更迭されたりして、結局そういうようなシリアスの事件が、あの事件の背景にあった。

だからそういう状況がありまして、一方党中央の中では私が言っているだけでなく、中国の内部文獻や公式な中国のこの事件の動乱の平定に関する北京市長の陳希同の報告が言っていますように、十八、十九日は二重政権状況であつたわけです。そして趙紫陽は三日間休暇をくれと言い出す。あなた方とは一緒にやって行けない。ですから趙紫陽はテレビの画面を通じて、鄧小平、李鵬打倒の宣言をして、彼だつてあの時点では食うか食われるか、自分が駄目になるか相手を倒すしかないわけです。趙紫陽はとても温厚な人ですけれども、彼がついに最後の決意をした。

そしてハリストをやっている学生を見舞って、ここへ来るのが遅すぎたと涙ぐむわけです。そういう状況が三ヶ月ちょっと前にあつたわけですから。そして鄧小平達と一緒にやって行けないと辞表を出した。今、党の総書記が辞表を出すのは、党中央が真つ二つということを見せつけるから、辞表を撤回せよと言われて、そしてたら病氣だから三日間休暇をくれと言う。だけど三日後には趙紫陽は新政府を樹立する積りであつた。国務院に替えて新しい国務院。それから北京市人民政府に替えて新しい北京市の政府ができる。こういう状況にあつたというのを当局者が盛んに言っている。

こういうような状況を考えますと、やはり中国の内部的な混乱と亀裂というものが非常に深刻であつた。であるが故にあそこかなりの武器その他が流れている。そうでなく一部武器が流れているくらいでは、そんなものはすぐ摘発できますし、同時に戒厳令をいつまでも続けている必要がない。ここに現在の深刻な中国の状況があると共

に、その敵家其等の中国民主陣線なんかが旗上げて、やがて、いつの日かという余地がある。

それからそれは実現するかどうかは今後の課題ですけれども、かなりの大きな動乱なり大きな変革というものを予想していると思います。そうであるが故に今の中国の戒厳令は排除できないという深刻なジレンマがありはしないかと思えます。以上が政治状況であります。

経済状況

当面心配している経済状況について触れてみたいと思えます。今日の中央政治局常務員の揃い踏みによる記者会見でも、やはり何と言っても経済の問題がいかに深刻か、ホテルなどは今困っていて国が援助していると言っていた。当面はそういう問題があると思えます。外貨収入は観光収入だけで約四十億ドルあります。ところがこの裸の四十億ドルが入ってくるかこないかで、今の中国では外貨準備

高の四分の一ぐらいに相当しますから大きいですけど、それだけではないのです。

みなさん中国に行きます

と、全部外貨兌換券というものに替えさせられる。この外貨兌換券を操作することによって、円というのは人民元に較べれば闇では物凄いのですけれど、例えば香港ドルが深圳あたりに行く五、六倍の闇になっていきますから、香港ドルというのは所詮はローカル・カレンシーです。香港の金持はそんな香港ドルでお金を蓄めません。にもかかわらずその香港ドルが人民元にくらべるとすぐく価値がありま

す。深圳に行くところが立ちどころに分ります。円はもともとと強いのですけれど、それを公定レートで一元が三六、七円でしようか替えさせられる。それが闇で倍ぐらいになってしまふ。そういうことを操作して中国は約百億米ドル位稼いでいます。観光収入というのは一番手

取早い外貨が入ってくる。それがなくなる。更にその外貨兌換券でうまく操作することができない。そういううまみが当面なくなります。それから国家財政が大変厳しい。深刻な赤字です。赤字であって経済を引き締めをやるというわけです。そうするとどうやってその財政を補填するか。中国では普通の人は税金は払わないので、八百元ぐらいある人が税金を払う。そうすると国営企業とかそれから新興の企業集団とか、そういうところが一番の財源になるのですが、そういうところはみんな趙紫陽グループで、例えば最近改革政策によって出てきた、四通公司というような大きなハイテク産業の企業は、全部社長以下今逮捕摘発されていますが、そういうところから税金を賄うわけに行かない。非常に財政危機が深刻化しています。

そこでまた人民元を増発するという政策をやるのです。この二月には三二〇億元という、国家の歳入の約四分の一くらいを、およそ一ヶ月で人民がすってしまった。そんなことをしますから、またものすごいインフレになる。そうすると経済を引き締めなければいけない。こういう悪循環があります。

それから第二は国際収支が非常に悪いわけです。特に観光収入が減ります。貿易は今年は非常に悪いです。そうすると外貨不足がますます深刻になる。しかも中国にとって最大の黒字を稼げる場所は香港であった。香港は最大の輸出市場なんですけれど、その香港は今日の北京は明日の香港ということ、今凄く動揺しています。香港の中間層はみんな国外に逃げようとしている。これから九七年まで百万人が出ようとしている。だから今日の会見でも香港は絶対大丈夫だから、このまま居てくれと一生懸命リップサービスをしていた。だけど香港は単純に治まるとは思いません。ここに大きな不安があります。

それから三つ目には、中国はこれまで大分借金をしてきて、円借款も第三次で八千百

億円上乘せしているわけですから。こういうものを総計すると、四百億米ドルになっている。円借款のように利率が二・五%で、延べ払いで、非常に中国にとって有利な、こういう借款ばかりならいいのでしようが、民間銀行も特に日本なんかは金余り現象ですから、中国に大分融資をしています。それぞれだけの利率で融資しているのか企業秘密ですけど、大体私の推定では三・七八%でしょう、プライム・レートより安いわけです。四%台のもあると思います。これをやがては返して行かなければならないわけです。

九二年頃から中国は累積債務の返済にかなり困るのではないか。それは九〇年代になれば改革と開放政策がうまく行って、そして経済も活性化して順調に行くという前提のもとでやって行った政策が、こういう状況になりましたから、かなり深刻な事象になりはしないか。結局この十年間全然経済がうまく行かなかっ

たことになるわけです。それで今徹底な引き締めをやるうれという問題があります。ですから日本もかうかしている、本当に中国と心中する積りで、下度アメリカがラテン・アメリカに大分貸して困ったような形まで考えないと、そう簡単に言って居られない。しかしながら日本がやったところで、中国全体が良くなるというわけでもない。何と言っても中国自身が自力で力をつけなければならぬ。

もう一つは失業問題がかなり深刻です。大体今七千万人が失業していると見ています。それらの人達が職を求め少こしでもいい仕事を求めて今移動していますから、中国国内は交通その他の混乱がもの凄いの。ですから高知学芸高校のような鉄道事故はしょっちゅう起こっています。だからそれらの問題を含めて考えると、ここ一、二年のうちにかなりの困難な状況が中国をおおってしまうのではないかと。その時に果して今のよう

な体制が持つのかどうか。それとポスト鄧小平という問題がオーバーラップしてきたときに、やはりかなりの変化があるのではないかと。

こういう変化を通じて行くと、やがて二十一世紀には、ひょっとすると中華人民共和国がもつと違ったものになってくる可能性もあるのではないかと。私達には日中関係という特殊な関係がありますけれども、今は共産主義の社会、社会主義の社会が大きく変貌しつつあります。ポーランドやハンガリーも誰も予想しなかった、中から共産主義体制が崩れて行くというような事態を迎えています。ソ連のペレストロイカがどうなるか、そして中国はそういう変化が急速であり過ぎた故に、今それを力で抑えたのですけれども、その中国が一体どうなるかということ、あまり日中関係というタイプだけではなくて、グローバルな視野の中で位置づけて見る必要があると思います。

現にパリで運動をしている

人達は、ポーランドの連帯型で行くのだと言っています。それは一方が武力制圧するに、非暴力でやれるかどうかということもありますけれども、しかしながらあいう形に対して、軍の内部でもかなりの抵抗があったのすから、おそらくこれが最後の暴力ではなかったかと思えます。そしておそらく鄧小平はラスト・エンペラーであったかも知れない。ということになりますと、今中国はそれを一生懸命締めつけて居ますけれども、その後の変化というのも大きいような気がします。

台湾

台湾のことに触れますが、台湾がどうなるかということでは非常に大きいということでは始めています。生活水準はもの凄く違います。こんなに違うので、それが中国を統一する妨げにならないかという質問が今日もありました。生活水準は中国の沿海部と内陸部

にもある。香港と大陸との間にもある。だから生活水準の違いつまり経済発展の違いは障害にはならない。やがては統一すると言っていました。が、逆に今台湾側は非常に自信を持っています。もう反共宣伝は必要ではないかと言わなければならない状況になってきています。

李登輝は非常に聡明な方です。ですからこれまでの政策を続けると言っています。中国側は統一政策として三通政策。貿易とか人の往来をやろうと。

これに対して台湾側は三通政策で、それは公式にはやらない。ただこれはあくまで原則であって、現実的に台湾は自信をもって中国との交流をして行くというのが台湾の政策です。この政策がかなり台湾の今後の対中国に大きなインパクトを与えるのではないか。

この場合は非常に厄介と言うか、中国は西側諸国に対しては非常に警戒的ですから、今のそういう政策のために、中国の国内から台湾に対

する期待が出てきた場合は、これはひょっとすると面倒な事になります。そのときにいつもの手法で国民党の或るいは反革命の陰謀だと言っても、もう通用はしません。今度の天安門事件のときも、一時そういうことを言おうとしました。あれは蔣介石一味の残党が、あの中から煽っていると言っても、誰もそんなことを信用しません。そうではないのですから。

ということになりますと、台湾からの影響については、今後二重の意味において、一つは今の中国の開放政策によって、台湾の資金や何かが大きな意味を持つということ。他方ではにもかかわらず台湾側が単なる反共ではなくて、やっぱりもう一度中国を本格的に変えようと考えています。これが将来どうなるかというのは大問題だと思えます。

台湾は当分今の政策を続けて行くでしょう。予見し得る将来は現状維持が続くと思います。国際収支も非常にいい

し、外貨準備は世界第二位です。一人当りのGNPは大陸の二十倍以上になりました。ですから外貨持ち出し制度も撤廃しています。最近チエコに行きましたら、東欧まで台湾の観光団が行っています。こういう時代ですから、そしてこの六月十日には電話とかテレックス・ファックス全部解禁しました。そういう情報はどんどん入って行く。こういうことは意外に大きいかなあと思います。

ですからこれは中国側の警戒を誘う面と、やはり同胞だから徐々にその同胞の力を借りて開発したいという、両刃の剣のような気がします。けれど、そういう状況に中国側もあるといつてよいですから、それがどうなっていくかが大きいと思います。いずれにしても改革と開放を続けると言いながら、一方ではブルジョア化に対しては断固として戦うという矛盾がそのまま今日のテレビの会見にも出てきます。

質問に答えてアメリカの動向

アメリカの中国政策はかなり大幅に変ってきていると思います。というのは、天安門事件のあった後、アメリカはかなりの制裁を言明して、中国に対する軍事協力は当面停止することを決めています。武器輸出その他についてはやらないことになっていて、少なくとも今、方励之夫妻の問題があります。中国のサハロフと言われる人が、アメリカ大使館に保護を求めているわけですから。ここがアメリカの偉大なところかも知れませんが、それでも、一物理学者の御夫妻の基本的人権とか、その自由を守るためにアメリカは、ひょっとすると米中関係を犠牲にするかも知れない。けれどもそれを守り抜くというのがアメリカの原則ですから、ブッシュはそれを崩さないと思えます。

若しこれを崩そうとすると、アメリカ国内の世論が黙っていないのではないかと。

れから特にアメリカの議会は、レーガン政権もそうでしたけれども、ブッシュ政権も大統領選挙をやる時共和党は勝ちますけれど、議会は圧倒的に民主党が強いわけです。その民主党の議員というのは、非常に或る意味では人権問題とかに強硬な人が居る。それからチベット問題とか、それから台湾との関係についても非常に親台湾的な人が、民主党の中には多い。それから共和党の中にも親台湾的な人が居ます。

もう一つはブッシュ政権のもとに居る、駐中国大使のジェームス・リリーという人がいます。この人をみなさん注目していただきたいと思えます。大変な人材です。長い間この間まで韓国の大使をやっていた。その前は北京のアメリカ駐在事務所に着任して一緒に居ました。それからその前には台湾に五年ぐらい居ました。CIAの出身でもあります。ブッシュもそうですけれども、CIAの出身だから暗いイメージがあるか

と言うと、非常に聡明な人で、中国語もよく出来るし、あんな外交官は居ないと思う。本命が北京に居るわけです。

ジェームス・リリーの集める情報とか、彼の指示にブッシュはやはり動かされると思っています。リリーを私も個人的に知っています。つい最近も話をすることがありますけれど、非常にリアリステイクで、今の江沢民、鄧小平政権の戒厳令下で、その思想を合法化するような立場をとる人ではない。そういうことを考えますと、かなりアメリカはきちんとした政策をとると思えます。ということは中国に対しては決して好ましいことではない。だから今日も西側々々と言うのですけれど、外国の勢力が我が国我が党を、中からひっくり返そうとしている。結局これはアメリカのことを言っていると思います。それからもう一つの要因を加えますと、キッシンジャーです。共和党の中国政策というのは、何と言ってもキッシンジャー自身が、ニクソン訪

中のときの立役者なので、キッシンジャーの影響があったと思います。ところが私は前からキッシンジャーの中国感には、非常に眉につばをつけて読んだりしていた。非常に中国を持ち上げるのです。

今回の事件でも権力の側に都合のいいことを言っています。もともと彼はソ連が嫌いですから、その分だけ中国に近くなるという人はよく居ますけれど、我が国でそういうパターンがよくあります。ソ連には厳しい余り中国にはメロメロに弱い人がいますが、キッシンジャーにはそういうところがあります。

ところでキッシンジャーは二十世紀は中国の時代であるかのようにしきりに言います。戦略論やる人文明論やる人はそうなんです。ポール・ケネディもそうです。確かに戦略論をやる人は中国を大きく描かないと、文明論的に話がか合なくなります。しかしいつか化けの皮がはがれると思ったら、最近ではワシントンポストとかニューヨークタイ

ムズがキッシンジャーを批判し始めた。彼は中国に融資する会社のコンサルタントとして、利権がらみではないかというところがアメリカ国内に出てきている。

ですからブッシュは中国政策と言うと、共和党、キッシンジャーの影響から逃がれようとしている。ですからそれだけキッシンジャーの神通力もなくなってきました。と言うことは、やはりアメリカは私はかなりリアルな政策、少なくとも戒厳令が解除されない限りは、今の政策を変更することはない。当分アメリカと中国との関係は、かなり冷いものになってくると思います。

日本のとるべき道

日本ではとまどっていますけれど、外国から見ると一体日本は何を考えているのか分らない。何となく一緒にあって西側の一員のような顔をすけるけれども、他方では抜けがけの功名というか、中国側の意を迎えて水先案内人になっ

て居ないと困るわけです。そこが一番不信感が持たれていくところですよ。今度パリでつづく痛感しましたけれど、非常にその点を言われました。フランスの学者とかは日本政府は何を考えているのか。彼等はエコノミック・アニマルで、中国とうまく商売できるというのであって、人権とかデモクラシーとかはどうでもいいのだというように、ヨーロッパは見ています。

この点は西側の一員として原則的なところはキチンとものを言う必要があると思います。それから中国に対しても今日の記者会見で、趙紫陽は何をしているかと、西側のジャーナリストが卒直に聞いていましたけれども、そういうことももう少し卒直に言うべきだと思います。それから中国は第三次借款の凍結を早く解除してくれと言うなら、やはり日本としてもいろいろ条件を出すべきだと思います。日中間で解決しなければならぬ問題がいろいろあると思います。投資保護協定の

問題でも、例外条項がついていて、非常にあいまいなところが残っています。それから合併企業が出て行っても、しよっちゅうビジネス・トラブルが起こっています。それから借款なんかもただバラまくだけでなくて、重点的に借款を供与して、上海から上海の地下鉄を作るとか。あの黄浦江に橋を架けるとか。そういうことを日本もキチンと主張しないと、今のバウマキ方式だと何となく砂漠に水を撒くような形になってしまふ。それから靖国問題、教科書問題という、戦前の日本の問題が出て来た場合に、いつも頭を下げて経済協力でその場をしのいでいるわけですが、こういうパターンについて、もうそろそろ止めなければいけない。

中国問題が日本人の世代によってイメージが違ふ。これほどイメージが違ふ国はないです。その中で共通しているのは偉大な中国文明というところが根本にあるのですが、同時に最近の若者を見ていすと、やはり中国はある意味で野蛮でしかも共産党があるという暴力を使ったということに對するもの凄い反発もあり、中国離れが進んでいて、決していいことではないと思いますけれど、当面は止むを得ないのではないかと。最近中国語学科の先生も言っていますけれど、一時は中国語を学ぶ学生がかなり居りました。特に第二語学に中国語を選ぶ学生が居ましたけれど、メッキリ少なくなりました。最近では東大でも外語大でもロシア語がブームなんです。何となく鄧小平が出てきて学生をバンバンとやってしまったあのイメージよりも、何と言ってもペレストロイカのゴルバチョフが格好がいいわけですよ。そして一方にエリツインのようなのが居て、ちゃんと彼はやっています。ところが中国は趙紫陽にしても、胡耀邦にしても切られてしまった、こういうイメージがありますから、なかなか若者を引きつけないでしょう。今のようなことを中国がやっている限りは。

(註) 今回は発行日を早めてお送り致しました。

談話室より

定例会のこと

第二四六回定例会は十月二十七日午後二時よりホテル・ニューオータニにて開催。

海外環境協力センター理事長橋本道夫氏より「地球環境保全と人口」について伺った。

(次号掲載予定)

出席会員

愛川 重義	青木 正信
有光 茂夫	石坂 誠一
井本 台吉	宇山 厚
伍堂 輝雄	鹿喰 清一
鈴木 建	寺田 治郎
南部 哲也	二上 英治
坊 秀男	堀 英治
三宅 和子	森口 八郎
水上 利正	山地 一寿

計 報

佐伯 勇氏(会員)

近畿日本鉄道名誉会長が十月五日逝去されました。八十才。謹んで御冥福を祈ります。(合掌)